薩摩藩の神社本殿における向拝柱について

—三間社以上を中心として—

A STUDY ON *KÔHAI* PILLARS IN THE ARCHITECTURE OF THE INNER
SANCTUARY OF SHINTO SHRINES IN THE SATSUMA-HAN,
FOCUSING ON SHRINES WITH THREE OR MORE BAYS

吉満史絵*, 土田充義**

Fumie YOSHIMITSU and Mitsuyoshi TSUCHIDA

The aim of this study is to investigate the relationship between *kôhai* pillars (pillars supporting a narrow portico which projects from the roof over the *moya* - the raised core of the shrine) and the *hisashi* (the peripheral area in front of the *moya*) in the architecture of the inner sanctuary of Shinto shrines with facades featuring three bays (*sangensha*) or more. The study concentrates on shrines in the former Satsuma feudal domain. First we classified shrines according to whether they have *kôhai* pillars or *kaidanshita hisashi* pillars (pillars supporting a portico of the same width as the roof covering the *moya*). Next, we distinguished between shrines which have a *hisashi* in front of the *moya* and those that do not. We make it clear that, in their primary form, the inner sanctuaries with *kôhai* pillars have *hisashi* in front of the *moya*, while those with *kaidanshita hisashi* pillars do not. Thus, the *hisashi* in front of the *moya* is related to the presence of *kôhai* pillars.

Keywords : *kôhai* pillars, Shinto shrine inner sanctuary, *hisashi* in front of *moya*, *kaidanshita hisashi* pillars
向拝柱、神社本殿、身舎前庇、階段下庇柱

1. 序

薩摩藩の近世神社本殿には、龍・瑞雲が施された向拝柱があり、全国の近世神社本殿の中でも特徴¹をもっている。この龍柱を何故薩摩藩の神社本殿に用いたのであろうか。これの研究課題を進める前段階として、向拝柱をとりあげた。向拝柱には何か重要な意味が含まれているのではないか。その成立要因を探りたいと考えたことが発端となって、向拝柱をとりあげたしだいである。

ここでとりあげた向拝柱とは、向拝を支える柱のことである。では、向拝²とは何か。実は向拝を向拝柱を含めた全体で指すこともあるが³、本論においては向拝と向拝柱を区別して進めたい。

過去の研究において、神社本殿の向拝柱に焦点を当てて述べた論文は、まだ見つけ出していない。しかし、寺院を含めて向拝の成立過程について述べた大森氏の文献がある⁴。ここでは、国宝大報恩寺本堂(京都)の修理工事に基づき「初め向拝柱は母屋柱筋に立てられ、その後柱筋から外れたことにより手挟が用いられるようになった」と述べたもので、向拝と身舎との接手法について構造的に捉えたものである。本論では、向拝柱だけを捉えるのではなく、本殿平面形式との関係で考えようとしている。また、伊藤氏の文献⁵に「向拝の原形は、寝殿造にあるようである。寝殿造では、橋隠、日隠などといって、階段上に庇屋根をつけることがはじまった。それが、鎌倉時代になって仏堂の向拝となったと思われる。」とある。日本建築史における向拝の捉え方について挙げると、流造や春日造の前庇で、建物の正面全柱間の幅を持つものを、向拝とは言わないとする伊藤氏⁶・太田博太郎氏の説⁷や流造や春日造の前庇で、建物の正面全柱間の幅を持つものも向拝とする説⁸があ

る。このように、両者は、区別される場合と混同されている場合があり、大森氏⁹も両者を向拝として述べている。しかし、本論においては、本殿前方の屋根が狭まっている部分を支える柱を向拝柱とし、本殿の正面全柱間の幅のまま前面に出て、それを支える柱を、階段下庇柱¹⁰として区別する。両者は、本殿形式の成立過程において違いがあると考えられるので、区別した。

向拝柱は、先に述べたように本殿前方の屋根が狭まった部分を支える柱で、通常、三間社の場合、一間の狭まった屋根をもち、五間社の場合、三間の狭まった屋根をもつというように三間社以上が、通常区別できる間数であるということが言える。もちろん、一間社において前者のような狭まった屋根をもつ神社が、薩摩藩には、秋葉神社本殿、八坂神社本殿の入母屋造妻入、保食神社本殿入母屋造平入唐破風付の3社において見られるが、これらを除けば、通常は一間社の場合、階段下庇柱の身舎屋根と正面が同様の幅の屋根になってしまい、区別できない間数となる。また、一間社は小祠的な要素があり、三間社以上の本殿とは発生過程において区別して考える必要があると思われる。更に、龍柱を有す藩内神社本殿は、すべて三間社以上である。これらにより、本論においては、三間社以上を対象とすることにした。

次に、龍柱を有する本殿は、向拝柱と身舎との間に、床とか室とかの庇を必ず設けている¹¹。それで、これらのことと向拝柱との関係を探るために身舎前にある部分を前庇¹²・前床¹³・前室¹⁴・前廻庇¹⁵と分類して、全体をまとめて身舎前庇¹⁶とした。三間社以上で、龍柱ではない向拝柱を有する本殿は、11社ある。そのうち6社が、

* 鹿児島大学大学院理工学研究科 博士後期課程・工修

** 鹿児島大学工学部建築学科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Science and Engineering, Kagoshima Univ., M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kagoshima Univ., Dr. Eng.

身舎前庇を有する。このように、薩摩藩の向拝柱を有する本殿は、身舎前庇を多く用いる地域であると思われる^{註17}。

この身舎前庇と向拝柱をもつ本殿について、前庇、前床、前室という名称を使っていないが、中世神社本殿の形式分類を行った宮沢氏の論文^{註18}に、遺構例として園城寺新羅善神堂と三輪神社本殿につく身舎前庇は、前室であり、それを「庇部分全体に床を張り、1室をつくる。」と表現している。そこで指摘されているのは、「三間社流造は、屋根形式では普通の形式とその一変形と見られる流造の庇の前方にさらに向拝をつけたものがある。」と述べ、滋賀県下のことであるが、「庇(前室)のない切妻造平入向拝付の本殿をただちに流造の変形とすることはできないであろう。」と指摘している。つまり、流造と切妻造平入向拝付の本殿の成立過程は別であろうと指摘しているように思われる。本論では、この指摘を踏まえて展開しようと考えている。ここでの本論の主旨は、向拝柱と階段下庇柱とは成立段階で異なることを明らかにして、身舎前庇との関係において向拝柱の成立要因を明らかにすることである。

2. 向拝柱・階段下庇柱を有しない本殿

向拝柱と階段下庇柱とを区別することの大切さを指摘した。その区別を本殿平面形式との照合で進めることにした。それに薩摩藩では古い本殿には向拝柱や階段下庇柱を設けていない。そこで、最初に向拝柱や階段下庇柱を有しない本殿から考察を進めることにした。

向拝柱、階段下庇柱のいずれも有しない本殿は、13社(表1)あり、すべて前庇を設けている。これらの神社を、縁の付き方で分類すると、1. 縁をもたない前庇本殿(見世棚)(図1-1)、2. 側面縁をもつ前庇本殿(図1-2)、3. 側面縁をもち且つ前庇の前方に縁を設ける本殿(図1-3)、4. 側面縁をもつが前庇の前方に縁はなく、そのかわりに背縁を設ける本殿(図1-4)の4通りに分けうる。稻荷神社本殿(図1-3)は、前方に縁がある三方縁で、更に外側に見える部分は、後補の覆屋の床で、当初から背面には縁はない。

見世棚の場合は、室町後期の箱崎神社本殿(重文指定)と安政四年(1857)の黒尾大明神社本殿の2社である。向拝柱、階段下庇柱を有する本殿も含めると、箱崎神社(図1-1)は、永禄二年(1559)の八幡神社本殿(大口市)(重文指定)と並んで最古の遺構である。最古の遺構の神社本殿が、向拝柱・階段下庇柱を有しない本殿であることは注目すべきことである。

側面縁と背縁がついた前庇本殿は、承応二年(1653)の中津神社本殿(図1-4)である。中津神社本殿は、藩内で唯一の本殿形式で前庇を

表1 薩摩藩の向拝柱・階段下庇柱を有しない三間社以上本殿

神社名	所在地	本殿建立年代	世紀区分	内陣正面間数	内陣側面間数	身舎内前室の有無	縁(分類)
箱崎神社	伊佐郡菱刈町	室町後期(応仁元年(1467)~元龜元年(1572))	15c後期~16c後期	3	2	無	無(1)
中津神社	鹿屋市高陽町	承応二年(1653)	17c中期	3	2	無	三方縁(4)
稻荷神社	都城市郡元町	享保十四年(1729)	18c前期	3	2	無	三方縁(3)
投谷神社	曾於郡大隅町	延享五年(1748)	18c中期	3	2	無	側面縁(2)
万八千神社	肝属郡車良町	宝暦八年(1758)	18c中期	3	2	無	側面縁(2)
吉利神社	日置郡瀬野原	18c後半	18c後半	3	2	無	側面縁(2)
宮浦神社	始良郡福山町	文化元年(1804)	19c前期	3	2	無	側面縁(2)
岩宮神社	肝属郡田代町	天保五年(1834)	19c中期	3	2	無	側面縁(2)
栗野神社	高岡町大字高浜字	嘉永五年(1852)	19c中期	3	1	有	側面縁(2)
栗野神社	高岡町大字下倉永字	嘉永五年(1852)	19c中期	3	1	有	側面縁(2)
黒尾大明神社	鹿兒島郡三島村	安政四年(1857)	19c中期	3	2	無	無(1)
鹿兒島神社	鹿兒島市草牟田町	安政四年(1859)	19c中期	3	2	無	側面縁(2)
城野神社	始良郡始良町	文久三年(1863)	19c中期	3	2	無	側面縁(2)
計		13社					

設けている。同様に前庇を有する八幡神社本殿(大口市)(永禄二年(1559))は、向拝柱一間を有するが、それは元和二年(1616)のことであるという^{註19}。したがって、以前は、向拝柱を有しない本殿であった。このことから、向拝柱を有する本殿が後に出現したことが分かる。

側面縁を有する前庇本殿は、9社で、最も多い。稻荷神社(図1-3)の次に古い延享五年(1748)の投谷神社本殿を筆頭に、文久三年(1863)の城野神社本殿まで例がある。投谷神社本殿(図1-2)に見られる側面縁を有する前庇本殿は、側面縁を有する見世棚に階段が付加した形式であると思われる^{註20}。この推察を認めうるなら、向拝柱・階段下庇柱を有しない神社本殿が後になって階段を設けることになったといえるだろう。これら二つの神社本殿の原形式(八幡神社本殿(大口市)・巨田神社本殿)から、前庇を有する神社本殿に階段がまず付いて、次に向拝柱が立てられることになったことが分かる。それらの出発ともいえる見世棚本殿が最も原初的な本殿形式といえるだろう^{註21}。

側面縁をもつ前庇本殿の中では、嘉永五年(1852)の栗野神社(高岡町大字高浜字)と同年代の栗野神社(高岡町大字下倉永字)の19世紀中期に身舎側面二間が内陣一間と前室に柱と扉で区画され、身舎内前室^{註22}となる例が出てくる。これは、当初はなかったが、時代が降って身舎内を区画して前室をつくると思われる。薩摩藩では早期に属する花尾神社にも見られる。

以上のように、向拝柱・階段下庇柱を有しない本殿の中で最も古い形式は、見世棚造で、前庇のみ付け、その後前庇に縁と階段が付加した形式となり、その後に向拝柱がつくことを指摘しうる。

3. 向拝柱を有する本殿

3-1. 身舎前庇または身舎内前室を有する本殿

薩摩藩の三間社以上の神社本殿で、向拝柱を有する本殿は、19社(表2)である。そのうち、前庇、前床、前室、前廻庇という身舎前庇を有する本殿は、14社(表2)である。19社中14社で、約74%を占め、薩摩藩の向拝柱を有する本殿は、身舎前庇を付ける形式が多い。

身舎前庇を有する本殿で、遺構として最初は、前庇をもち、本殿建立年代は永禄二年(1559)であるが、向拝は元和二年(1616)で後補の八幡神社本殿(大口市)(図2-1)で、前庇形式(図2)は19世紀中期ま

図1-1 箱崎神社本殿

図1-2 投谷神社本殿

図1-3 稻荷神社本殿^{註(1)}

図1-4 中津神社本殿

図1 向拝柱・階段下庇柱を有しない本殿

で見られる(表2)。次は、前床形式(図3)であり、元禄五年(1692)の八幡神社本殿(鹿児島郡吉田町)を筆頭に19世紀中期まで見られる。次は、前室形式(図4)であり、正徳五年(1715)の霧島神宮本殿(図4-1)を筆頭に18世紀後期まで見られる。前室形式はすべて18世紀に建立されており、前庭形式と前床形式のように19世紀には例が見られない。前室というのは、霧島神宮本殿や鹿児島神宮本殿など島津氏と関連がある有力社を中心に用いられている。

図2-1 八幡神社本殿(大口市) 図註(2)

図2-2 菅原神社本殿 図註(1)

図2-3 八幡神社本殿
(日置郡日吉町)

図2-4 白鳥神社本殿 図註(1)

図2-5 竹屋神社本殿

図2 前庭形式本殿

表2 薩摩藩の向拝柱を有する三間社以上本殿の身舎前庭分類及び年代

身舎前庭の有無	身舎内前室の有無	身舎前庭か身舎内前室分類	神社名	所在地	本殿建立年代	世紀区分	内陣正面間数	内陣側面間数	縁
有	無	前庭	八幡神社	大口市	永禄二年(1559) 向禄元和二年(1616)	16c中期 17c前期(向)	3	2	四方縁
			菅原神社	えびの市	寛文五年(1665)	17c中期	3	2	側面縁
			八幡神社	日置郡日吉町	18c後半	18c後半	3	2	側面縁
			白鳥神社	えびの市	文化頃(1809~1818)	19c前期	3	2	側面縁
			竹屋神社	加世田市	天保七年(1836)	19c中期	3	2	側面縁
		前床	八幡神社	鹿児島郡吉田町	元禄五年(1692)	17c後期	3	2	三方縁
			枚間神社	握宿郡開聞町	天明七年(1787)	18c後期	3	2	四方縁
			指宿神社	指宿市	弘化四年(1847)	19c中期	3	2	四方縁
			東霧島神社	北諸郡郡高崎町	嘉永二年(1849)	19c中期	3	2	三方縁
			霧島神宮	始良郡霧島町	正徳五年(1715)	18c前期	5	2	四方縁
		前室	鹿児島神宮	始良郡隼人町	宝暦六年(1756)	18c中期	5	2	四方縁
			蒲生八幡神社	始良郡蒲生町	天明四年(1784)	18c後期	3	2	三方縁
			兼喜神社	都城市	天明八年(1788)	18c後期	3	2	四方縁
		前廻廊	新田神社	川内市	嘉永三年(1850)	19c中期	3	2	四方縁
計			14社						
無	有	前室	花尾神社	日置郡郡山町	18c前半(正徳三年 1713)建立説あり	18c前半	5	1	三方縁
計			1社						
無	無		日枝神社	始良郡吉松町	19c初	19c初期	3	2	三方縁
			合明寺日枝神社	国分市	19c前期	19c前期	7	2	三方縁
			王子神社	鹿児島郡吉田町	19c前半	19c前半	3	2	四方縁
			姪良神社	始良郡隼人町	19c中期	19c中期	3	2	三方縁
			計			4社			
合計			19社

図3-1 八幡神社本殿
(鹿児島郡吉田町)

図3-2 枚間神社本殿

図3-3 指宿神社本殿

図3-4 東霧島神社本殿 図註(1)

図3 前床形式本殿

図4-1 霧島神宮本殿

図4-2 鹿児島神宮本殿

図4-3 蒲生八幡神社本殿

図4-4 兼喜神社本殿 図註(1)

図4 前室形式(身舎前)本殿

図5 花尾神社本殿—身舎内前室を有する本殿

図6 新田神社本殿—前廻庇形式本殿

また、花尾神社(図5)は内陣側面が一間、その前に前室があり、形式としては身舎内に前室があることになり、身舎内前室を有すると言える。内部を調査すると、内陣正面は扉で、身舎内前室正面は藁戸を設け、霧島神宮本殿、鹿児島神宮本殿の身舎前前室の造りと類似している。これは、身舎内か身舎前かの違いだけで、前室としての用途は同じくして造られている。他の神社は、すべて身舎側面が二間で身舎前に前室がつき、他の3形式もすべて身舎側面が二間で身舎前庇がつくので、身舎側面一間を前室とする形式は1社のみである。何故、身舎内に前室を設けるのかを明らかにできないが、前室が重要であったために、身舎を仕切ってまで設けたことは認めうる。

前廻庇(図6)は、19世紀中期と見られる新田神社本殿1社のみに見られる形式である。先の前室形式の霧島神宮本殿、鹿児島神宮本殿は、それぞれ三間四面庇、五間四面庇の身舎前庇が前室として区画されたものである。それとは異なり新田神社本殿(図6)は、三間四面庇の廻庇が側面中央で前後に区画され、前方の庇も取り込んだ形式なので、前廻庇とした。

前室を設ける場合は、四面庇のうちの身舎前庇が区画されて生じたものと、身舎前に一間あるものと2通り見られる。前者の中でも、霧島神宮本殿は、四面庇のうち前室の奥行(2729mm)が、後面庇の奥行(1913mm)や両側面庇の幅(1908mm)よりも広い(図4-1)。これは、身舎前庇を他の庇より当初から広く計画している例である。宮崎八幡宮本殿の前室は、神前読経をするための僧の座する場として成立したと考えられる^{註23}。これは、神社本殿の前室に人が入り座する場として成立したのではないかと察せられる。薩摩藩ではどうかというと、慶応二年(1866)神仏混淆禁止令実施のため、藩命をもって9月17日に国学者である後醍醐院真柱外5名が霧島神宮本殿において神に報告祭を行った時の祝詞の中^{註24}に僧がお祭りをを行うことを批判した所がある。また、霧島神宮社務所では、僧が霧島神宮本殿の前室に入って祭祀を行っていたと伝えられている。このことは、前室に人が入って祭祀を行う場として用いられるために広げられたことを示唆している。

図7-1 日枝神社本殿

図7-2 台明寺日枝神社本殿

図7-3 王子神社本殿

図7-4 蛭児神社本殿

図7 身舎前庇を有しない本殿

3-2. 身舎前庇を有しない本殿

身舎前庇を有しない本殿は4社(表2)ある。この4社(図7)は、19世紀に建立したと見られる本殿である。身舎前庇を有する本殿は、遺構として向拝柱が17世紀前期からある。身舎前庇を有しない本殿は、17世紀前期には、見られなかった形式であるため、身舎前庇を有する本殿より時代が降ってから現存することになる。これは薩摩藩の現存する神社本殿からの推察である。もっと広く日本全体から見ても、身舎前庇を有する本殿向拝柱の成立の方が、身舎前庇を有しない本殿向拝柱の成立よりも早いことは、確かめえた^{註25}。

当初は身舎前庇を有していたものが、時代が降り19世紀になれば、大社や有力社ではない神社に、身舎前庇を有しないで向拝柱が付加した形式が生じたものと思われる。

19世紀前半と見られる王子神社(図7-3)は、向拝柱とつながる中央間の身舎前の縁が他の間より少し延長している。また、19世紀中期と見られる蛭児神社(図7-4)は、向拝柱とつながる中央間の身舎前の縁が2倍ほど広がっている。これは、身舎前庇は有しないが、その代わりに向拝柱と身舎をつなぐ中央間の身舎前の縁のみが延びて、本殿身舎の中央間前が祭祀上広くなる必要性があったのではないかと考えられる。これにより、身舎前庇を有しないが、身舎前の中央間が、重要であると言える例である。

このように、向拝柱を有する本殿で、身舎前庇を有しないものは、19社中4社と少なく、身舎前庇を有する本殿が主流を占める。当初は身舎前庇を有していたものが、時代が降り19世紀となると、身舎前庇をもたない本殿に、向拝柱が付加した形式が生じたと考えられる。

3-3. 身舎前庇を有する本殿と有しない本殿の成立要因の相違

身舎前庇を有する本殿遺構は、向拝柱が17世紀前期から見られ、身舎前庇を有しない本殿は、19世紀にならないと見られない(表2)。身舎前庇を有しない本殿は、身舎前庇を有する本殿向拝柱が見られる17世紀前期には、遺構がない。偶然にも遺構がないということではなく、向拝柱の成立にあたっては、身舎前庇が大切な役割を果たしていたこと

図8-1 猪田神社本殿

図8-2 七狩長田貫神社本殿（現状図）

図8-3 八幡神社本殿（薩摩郡里村）

図8-4 若宮四社八幡宮本殿

図8 階段下庇柱を有する本殿

表3 薩摩藩の階段下庇柱を有する三間社以上本殿

神社名	所在地	本殿建立年代	世紀区分	縁
猪田神社	串木野市	貞享四年(1687)	17c後期	前方縁
七狩長田貫神社(当初)	鹿屋市	享保十九年(1734)	18c中期	四方縁
八幡神社	薩摩郡里村	文化五年(1808)頃	19c初期	三方縁
若宮四社八幡宮	薩摩郡宮之城町	安政六年(1859)	19c中期	三方縁

が考えられる²⁶⁾。

そのために身舎前庇を有しない本殿に向拝柱が付くのは、内的要因ではなく、向拝柱をもつ本殿の影響を受けるといった外的要因によって成立したと考えられる。

4. 階段下庇柱を有する本殿

向拝柱と区別して、本殿正面幅と同じ幅で庇を出し、それを階段下で支える柱を階段下庇柱とした。薩摩藩では、その本殿(図8)は、向拝柱を有する本殿19社に対して、4社(表3)と少なく、4社とも身舎前庇をもたない。遺構が少ない中ではあるが、階段下庇柱を有する本殿は、身舎前庇をもたずに成立したのではないかと考えられる²⁷⁾。貞享四年(1687)の猪田神社(図8-1)が遺構として、最初に見られる例であるが、縁が前方しかなく、前方縁の例は、三間社以上の本殿の中でも1社のみで珍しい。階段は中央から出て幅が狭い段から始まり、これを含めて4級と段数が少なく、現在の縁や階段は後補のもので、小規模であることから、当初は、箱崎神社本殿(図1-1)のような見世棚造であったかもしれない。もしそうだとすると、当初は前庇であったものが、前方の縁と階段に変化し、階段下庇柱となった例といえるが、例外と考えた方がいい。というのは、今まで調べた結果では、見世棚造から階段下庇柱ができるという関係は見い出せないからである。

享保十九年(1734)の七狩長田貫神社(図8-2)は、現状では、三間とも身舎前縁の奥行が延長し、その中で中央間のみ階段下庇柱まで縁が繋がってさらに中央間のみ階段がとりつけられ非常に珍しい形式をしている。しかし、この拡張された縁板の下にはもともと5級の本階が隠れており、その縁板と中央間のみにとりつけられた本階は後補である。よって、当初は身舎前縁が階段下庇柱に接していなかったと考えられる。その後、三間の身舎前縁の奥行が全体的に延長し、中央間のみがさらに庇柱まで延長し、階段を設けて、現在の形態になったと考えられる。

以上のように、遺構が少ない中ではあるが、これに加えて全国の三間社以上の本殿も考慮して²⁸⁾、階段下庇柱を有する本殿は、身舎前

庇をもたずに成立したのではないかと考えられる。

5. 向拝柱と階段下庇柱を有する本殿の相違

薩摩藩の三間社以上の向拝柱と階段下庇柱を有する本殿23社中、向拝柱を有する本殿は19社で主流を占める。向拝柱を有する本殿の中で身舎前庇を有する本殿は、19社中14社で、更に身舎内前室を有する本殿が1社ある。残り4社はいずれも19世紀建立で新しい。このことは向拝柱成立後に向拝柱だけを本殿前に用いたと考えられるので、当初、向拝柱を有する本殿はすべて身舎前庇または身舎内庇を設けていたといえる。

階段下庇柱を有する本殿は、身舎前庇をもたずに成立したと推察した。

ゆえに、薩摩藩の三間社以上の神社本殿において、向拝柱を有する本殿は、身舎前庇とともに成立し、階段下庇柱を有する本殿は、身舎前庇なしで成立したといえる。そして、時代が降ると、向拝柱を有する本殿においても身舎前庇を有しない本殿が見られる。

以上のように、向拝柱を有する本殿と階段下庇柱を有する本殿の成立は、身舎前庇の有無という本殿形式にみる違いがあり、両者を分ける最も重要な要素である。本殿の身舎前や四面庇も、時代が降ると、数が増え、全体的に平面が拡張してゆく傾向にあるが、階段下庇柱を有する本殿は、本殿が拡張してゆく前の段階で、身舎前庇が成立する前の本殿形式である。それに対して、向拝柱を有する本殿は、本殿が拡張してゆき、身舎前庇ができてから成立した形式であり、階段下庇柱を有する本殿との重要な相違であるといえる。

6. 向拝柱の成立要因

先に述べたように、向拝柱を有する本殿は、身舎前庇とともに成立したと考えられる。管崎宮本殿においても前室で僧が神前読経を行っていることが指摘され、霧島神宮本殿においても同様に前室で僧が入り拝んでいたと察せられる。前室で祭祀を行っていたと思われる。身舎前庇は、人が入り祭祀を行う場として生まれたと推測される。人が本殿身舎前まで上がるという動作によって生じる階段を覆うということとで階隠が生まれた。それが、身舎前が拡張し、身舎前庇が成立するようになり、そこに人が座する場ができて、そこへの階段を覆うために向拝柱が成立したと考えられる。したがって、向拝柱の成立要因に身舎前庇の存在を指摘した。一旦向拝柱が成立すると身舎前庇のない本殿に付加する形で建てられることになって、本殿を荘厳にしたといえるだろう。

7. 結

三間社以上の薩摩藩の神社本殿は、向拝柱と階段下庇柱を有する本殿のうち向拝柱を有する本殿形式の方が主流を占める。向拝柱を有する本殿で、身舎前庇を有しない本殿は、19世紀になって初めて見られることから、向拝柱は、身舎前庇との関係で成立したと考えられる。

それと比較して、階段下庇柱を有する本殿は、遺構が少ない中ではあるが、すべて身舎前庇を有しておらず、身舎前庇をもたずに成立したと考えられる。

このように、向拝柱と階段下庇柱を有する本殿は、身舎前庇の有無という本殿形式の違いがあり、区別すべきことを述べた。階段下庇柱を有する本殿は、身舎前が拡張する前の段階の本殿形式であり、向拝

柱を有する本殿は、身舎前が拡張した後の本殿形式である。

身舎前底は、人が入って祭祀を行う場としての用途があると推測される。人が本殿身舎前まで上がるのに必要な階段を覆うことで、階隠として生じてきたものが、身舎前の拡張が進み、身舎前底が成立し、そこに人が座する場ができて、そこへ進むために生まれたものが向拝柱であると考えられる。

よって、向拝柱の成立要因として、身舎前底が重要な役割を果たしたことを指摘した。

謝辞

調査に御協力くださった神社関係者の方々及び御助言いただいた霧島神社事務所山下建雄と鹿児島大学教育学部日本史学助教授日隈正守先生及び西洋史学教授伊藤正先生、医学部のハワード・デビッド・マルヴィー先生に心より感謝申し上げます。

註

- 註1 拙稿「神社建築における龍柱について」日本建築学会大会学術講演梗概集1992年8月 pp. 949-950、薩摩藩領内の神社建築における龍柱の研究 日本建築学会大会学術講演梗概集1994年9月 pp. 1533-1534、近世神社建築における龍柱の研究 日本建築学会大会学術講演梗概集1998年9月 pp. 9-10
- 註2 向拝とは、社殿・仏堂の正面に差し出された構造物をいう(「建築大辞典」彰国社1976年3月第1版発行 p498)。
- 註3 向拝の説明に図を入れ、その図に向拝柱を記入している(「日本建築辞典」中村達太郎著 丸善株式会社 明治39年初版発行 p215)。
- 註4 社寺建築の技術 ―中世を主とした歴史・技術・意匠― 大森健二著 (理工学社 1998. 8. 20 pp. 151-170)
- 註5 古建築のみかた 伊藤延男著 第一法規 昭和42年第1刷発行 p267
- 註6 古建築のみかた 伊藤延男著 第一法規 昭和42年第1刷発行 p267
- 註7 国史大辞典第5巻(向拝解説担当: 太田博太郎) 吉川弘文館 昭和60年2月 pp. 487-488
- 註8 例えば、「日本建築辞典」(中村達太郎著 丸善株式会社 明治39年初版発行)において春日造(p97)、流造(p141)で向拝としているし、「原色日本の美術16神社と霊廟」(稲垣栄三著 小学館 昭和43年初版発行)においても、春日造の円成寺春日堂・白山堂の正面部分を向拝、向拝柱とし(p75)、流造の賀茂別雷神社社殿の正面部分も、向拝としている(p76)。また、「社殿形式から見た近世備後の園域について 備後における近世神社本殿建築の研究(1)」(吉信都夫、沢登宜久、実成憲二 日本建築学会計画系論文集 第473号 1995年7月 pp. 121-130)と「備後における近世本殿の平面的特徴について 備後における近世神社本殿建築の研究(2)」(吉信都夫、沢登宜久、実成憲二 日本建築学会計画系論文集 第484号 1996年6月 pp. 203-211)において、本殿建築を分類するのに流造の正面部分を向拝としている。
- 註9 社寺建築の技術 ―中世を主とした歴史・技術・意匠― 大森健二著 (理工学社 1998. 8. 20 pp. 151-170)
- 註10 階段下底柱とは、本殿身舎と同じ幅で屋根が延びて、階段下で支える柱をいう。まだ用いられていない名称であるが、向拝柱と区別したので用いた。そうすると、階段下底柱と身舎前底柱を区別できる。
- 註11 龍柱を有する本殿は、8社ある。そのうち龍柱と身舎との間に前底が1社、前床が2社、前室が4社、前廻底が1社で、すべて身舎前底をもっている。
- 註12 前底とは、正面幅が本殿身舎と同じ幅で、側面縁幅より広くして、柱をもつ前方部分をいう。中津神社本殿のように前底の前に柱を置く場合と八幡神社本殿(大口市)のように前底の柱より更に前方に縁が付く場合の2通りがある。また、箱崎神社のような見世棚造は、本論においては、前底と位置付けた。前底は、文献において(重要文化財13 建造物Ⅱ 文化庁監修 毎日新聞社 昭和48年9月)、中津神社本殿に見られる前底を前床と同様に「底床張り」とし、八幡神社本殿(大口市)の前底は「吹放し」としている。前底と前床を有する本殿の相違は、前床の方が縁より床が高くなる点であり、前底の方が簡易な形式であると言える。前底・前床・前室・前廻底の身舎前底の4形式の中で、最も簡易な形式であり、身舎前ということが重要であると思われるので、前底として分類し、とりあげた。
- 註13 前床のことを「底床張り」としている(重要文化財13 建造物Ⅱ 文化庁監修 毎日新聞社 昭和48年9月)。薩摩藩の神社本殿においては、霧島神官の前室に見られるように三間四面であるが、区切られた身舎前底がそれ以外の底に比べて奥行が広くっており、用途が違い、身舎前ということが重要であると思われ、身舎前と他の底を区別すべきであると考えた。また、前室から建具を取り除いたものが前床であるということから前室とも繋がつくる。ゆえに、本論においては、身舎前であることにより、「底床張り」ではなく、前床とした。前床とは、縁よりも高い前方部分をいう。
- 註14 前室とは、前床に建具を設けて、囲まれているために室とし、前方にあるから前室とした。文献において、流造本殿の五、三間社に「前室付五間社、前室付三間社」としてある(重要文化財13 建造物Ⅱ 文化庁監修 毎日新聞社 昭和48年9月)。よって、前室という語は昭和48年からすでに用いられている。また、伊原氏(文化財講座 日本の建築2古代Ⅱ・中世Ⅰ 中世の神社建築 伊原恵司 第一法規 昭和51年6月 pp. 180-182)が、中世における流造本殿のところで前室付本殿について述べており、昭和51年に前室という語を使用している。他に、坂田氏(前室付本殿の成立に関する一考察 坂田泉 日本建築学会計画系論文集第374号 昭和62年4月 pp. 93-99)の前室付本殿についての論文があり、昭和62年に前室付本殿という語を用いている。このように、前室という語は、広く使われている。
- 註15 前廻底とは、本殿廻りに底がつき、前方一面だけでなく、側面の一部の底を含め

る場合をいう。前廻底1社は、新田神社本殿である。前廻底を有する神社本殿は、前廻底そのものとして論文・文献にとりあげられていないが、四面底を有する本殿という視点から四面底系平面の神社本殿の成立事情や成立年代を明らかにした三浦氏の学位論文がある(四面底系平面の神社本殿の研究 三浦正幸著 私家版 昭和61年)。

- 註16 本殿における身舎前底とは、本殿身舎前にある底で、本殿身舎の床より低い。それを分類すると、前底、前床、前室、前廻底に分けうる。これらの総称が、身舎前底である。
- 註17 前床付本殿が、三間社流造で全国平均より2倍近く多い(「鹿児島県の近世社寺建築」鹿児島県教育委員会 昭和63年 pp. 18-19)。他に滋賀県において、三間社以上の国宝・重要文化財の神社本殿37社で、向拝柱を有する本殿は29社ある。そのうち身舎前底を有する本殿は26社で、約90%を占め、身舎前底をもつ向拝柱付本殿が圧倒的に多用される地域である。宮沢氏の論文である中世神社本殿の形式分類とその地域的分布(上)(日本建築学会論文報告集第151号 昭和43年9月 pp. 51-56)において、「底の前方にさらに向拝をつけることは、滋賀県に多いことはすでに知られていたが、中世にかぎれば滋賀県の三間社流造はすべて向拝付である。この形式は、流造以外の三間社隅木入春日造である地主神社本殿においても見られ、三間社入母屋造平入である大佐原神社本殿は、平面形式が底と向拝付の流造と同様である。流造で底の前方にさらに向拝をつけることは、滋賀県のほかに北陸地方に多く、東北地方(秋田・三輪神社本殿)、中国地方(山口・今八幡宮本殿など)にも分布している。」ということが指摘されている。
- 註18 中世神社本殿の形式分類とその地域的分布(上) 宮沢智士 日本建築学会論文報告集第151号 昭和43年9月 pp. 51-56
- 註19 重要文化財建造物八幡神社本殿(鹿児島県)修理工事報告書(重要文化財八幡神社本殿修理委員会 鹿児島県大口市 昭和30年4月)に向拝がとりついている縦破風の接ぎ部分が風雨で傷んでいたとあり、向拝がない時代があったと見られ、年代は、永禄二年(1559)であるが、向拝は、元和二年(1616)であり、後補と考えられる。
- 註20 側面縁を有する前底本殿である巨田神社本殿は、当初(文永五年(1448))は階段がなく(「重要文化財 巨田神社本殿修理工事報告書」重要文化財巨田神社本殿修理委員会 宮崎県 昭和57年9月)、元禄八年(1695)には、階段が付加しており、階段が後補であることが確認されている。
- 註21 原色日本の美術16神社と霊廟 稲垣栄三 小学館 昭和43年初版発行(p195)に「現在、境内などに見られるいわゆる見世棚造の小神殿は、春日や賀茂の形式の簡略形であるが、かえてこれらが神社本殿の発生姿を示していると考えられることもできよう。」と指摘されている。
- 註22 本稿において、通常側面二間の身舎が、二間とも内陣であるが、一間を内陣とし、残り一間が前室で区画され、身舎内に前室ができるものを身舎内前室という。
- 註23 宮崎八幡宮本殿の底の成立 土田充義 日本建築学会論文報告集第216号 昭和49年2月 pp. 49-53 において宮崎八幡宮本殿の身舎前底が、神前経路をするための人の座する場として成立したとしている。
- 註24 霧島町郷土誌 霧島町郷土誌編集委員会 昭和42年 pp. 50-51 に慶応二年(1866)神仏混淆禁止令実施のため、藩命をもって9月17日後醍醐院真柱外五名霧島神官へ来り、神に報告祭を行った時の廃仏の祝詞に「霧島の鬼神の広前に畏み畏み申す。(中略)かけまくも畏き皇神連をさへ穢き僧等に委ねていつき祭らせ賜う風俗となりぬるは、痛くも恨く憤ろしき事なりしに、(中略)先ず皇神の宝殿の内を窺ひ奉り、且は神職等が神事仕奉る様をも見んが為、今日の生日の定日に神職等を召し集いまいらせて御神楽仕奉り、長くも宝殿の御戸を開きて拝み奉るは、尊き御霊代の穢き仏等に交こらい賜わん事を、畏み思ひ奉るが故なれば、(後略)」とある。
- 註25 鎌倉時代以前の国宝・重要文化財である三間社以上の神社本殿遺構の中で向拝柱を有する苗村神社西本殿 徳治三年(1308)、御上神社本殿 [鎌倉後期(1275-1332)]において、それぞれ、前室、一間四面で前廻底という身舎前底を有する。また、天皇神社本殿 正中元年(1324)は、一間三間で後面のない前廻底という身舎内底を有している。国宝・重要文化財の三間社以上の本殿遺構で、向拝柱を有していて、身舎前底も身舎内底も有しない本殿は、和爾下神社本殿 慶長(1596-1615)、赤神神社五社堂室人権現堂 宝永七年(1710)、赤神神社五社堂十桿師堂 宝永七年(1710)、赤神神社五社堂三の宮堂 宝永七年(1710)、赤神神社五社堂八王子堂 宝永七年(1710)、鹿島神官飯殿 元和五年(1619)、南宮神社摂社高山神社本殿 寛永十九年(1642)、南宮神社摂社下神社本殿 寛永十九年(1642)であり、16世紀末期頃より見られる。よって、向拝柱を有する三間社以上の国宝・重要文化財の本殿遺構で、身舎前底を有する本殿は、13世紀後期頃には見られ、16世紀末期頃より身舎前底も身舎内底も有しない本殿が見られるようになり、身舎前底も身舎内底も有しない本殿は、身舎前底を有する本殿より時代が降ってから見られることがわかる。ゆえに、現存する三間社以上の向拝柱を有する神社本殿から判断すると、身舎前底を有する本殿の成立が、身舎前底を有しない本殿の成立より早いと考えられる。
- 註26 註25で述べたように、鎌倉時代以前の国宝・重要文化財である三間社以上の本殿遺構からも、向拝柱は、身舎前底が身舎内底があつて成立していると考えられる。
- 註27 階段下底柱を有する国宝・重要文化財で、三間社以上の最古の遺構である神谷神社本殿 [建保七年(1219)]においても、身舎前底を持たない。また、三間社流造本殿の原形と見られる賀茂別雷神社本殿 [文久三年(1863)]や賀茂御祖神社本殿 [文久三年(1863)]も身舎前底をもたない。

また、三間社以上で身舎前底を有する本殿遺構は、宮崎宮本殿 天文十四年(1545)、伏見稻荷大社本殿 明応三年(1494)、宗像神社辺津宮本殿 天正六年(1578)、村檜神社本殿 室町後期(1467-1572)であり、15世紀後期より見られる。

よって、さきに述べたように階段下底柱を有する国宝・重要文化財の本殿遺構で身舎前底を有しない本殿は、13世紀前期には見られ、15世紀後期より身舎前底を有する本殿が見られるようになり、身舎前底を有する本殿は、身舎前底を有しない本殿より時代が降ってから見られることがわかる。ゆえに、現存する神社本殿から判断すると、階段下底柱を有する本殿は、身舎前底なしで成立したのではないかと考えられる。

- 註28 註27に同じ。
- 図註(1) 宮崎県の近世社寺建築(宮崎県教育委員会 昭和57年3月25日)を参考にした。
- 図註(2) 重要文化財建造物八幡神社本殿(鹿児島県)修理工事報告書(重要文化財八幡神社本殿修理委員会鹿児島県大口市昭和30年4月)による。

(2002年4月10日原稿受理, 2002年6月7日採用決定)